

## 彙報

### 平成二〇年度春期東洋学講座講演要旨

(『三國志』の世界を語る)

第五〇五回 五月二三日(火)

### 陳寿撰正史『三國志』の世界

東洋文庫研究員 多田 狷介  
日本女子大学名誉教授

#### 一、正史とは

正史とは、史書の分類の名目の一つ。唐の魏徵等奉勅撰、貞観十(六三六)年に成った『隋書』の「経籍志・史部」が、紀伝体の著作を正史として分類したのに始まる。唐の劉知幾の『史通』巻十二「古今正史第二」は『尚書』・『春秋』やその後の編年・紀伝二体の史書をひとしく正史としている。『明史』の「芸文志二」では紀伝・編年の二体をあわせて正史と称している。清の乾隆代、『四庫全書総目』を編輯し、紀伝体を正史とし、あわせて詔によって『史記』から『明史』に至る二十四史を正史とした。これより正史

の名称はこの二十四史が専有することとなった。一九二一年、中華民国大總統徐世昌の命で、さらに柯劭忞撰の『新元史』が正史に加えられた。これを含めると二十五史となる。なお、「撰」とは「文章を作ること・書くこと」。

#### 二、正史『三國志』本文と裴松之の注のこと

撰者陳寿(二三三～二九七)は蜀の人。蜀が亡んで後は西晋に出仕。『三國志』に注した裴松之(三七二～四五二)は南朝宋の人。本文と注とを併載した百衲本・武英殿本・盧弼集解本等のテキストがある。それらを校勘して成った陳乃乾校点中華書局本が便利である。この中華書局本には、一九五九年二月の第一版と一九八二年七月以降の第二版とがあるが、第二版の方が誤りが多いのは不思議である。

『三國志』は裴松之の注を得て重さを加えたとも評される。宋晁公武撰『郡齋讀書志』は「裴注は本文の數倍」と言い、元馬端臨撰『文獻通考』はこれを繼承、清武英殿本『三國志』の李龍官等の校刊識語は「三倍」と言う。近くは、楊翼驥は本文二十万字前後、注文五十四万字前後とするから、注は本文の二・七倍ということになる(裴松之と『三國志』、『歴史教学』一九六三年第二期)。さらにその後、王廷洽は中華書局本によって本文三十六万六千余字、注文三十二万余字(略談『三國志』与裴注的数量問

題「古籍整理研究学刊」一九八五年第三期、百衲本によつた呉金華は本文三十六万八千三十九字、注文三十二万二千七百七十二字の数值を得ている（『三国志校註』江蘇古籍出版社 一九九〇年一〇月）。王・呉両氏とも本文が注文の一・一四倍。これが正しく、楊氏以前の数值は覆るようである。なお、裴注の引用した書目数に關して、趙翼撰『廿二史劄記』卷六は「松之所引書凡五十余种」と言つてから、『謝承後漢書』以下百四十九種を列挙。馬念祖編『水経注等八種古籍引用書目彙編』（中華書局 一九五九年二月）は二百三種とし、中華書局本の「出版説明」は「二百十種」と言う。

### 三、曹操と呂布、興平元（一九四）年、

濮陽の戦いの「等人」について

『三国志・魏書』卷十八「典韋伝」に典韋の獅子奮迅の活躍を述べて「賊弓弩乱発、矢至如雨、韋不視、謂等人曰『虜来十步、乃白之』。等人曰『十步矣』。又曰『五步乃白』。等人惧、疾言『虜至矣』」とある。「等人」とは何か？『資治通鑑』卷六十一「漢紀・献帝興平元年」の条の元胡三省の注は「等人者、立等以募人、及第者、謂之等人。或曰、等人、一等応募之人也」と言うが、文字面からの臆断にすぎない。呉金華は既掲著書において、呉康僧会訳

『六度集経』卷一・卷二（大正新修大藏経）「本縁部卷三」から「等人」の三用例を拾いだし、「典韋伝」の「等人」はこれらの「等人」と同一とする。それはまた『三国志・魏書』卷一「武帝紀」の裴注所引魏魚豢撰『魏略』中の「等伍」、『宋書』卷九十一「孝義卜天生伝」中の「等類」、つまり「同伍」（伍を同じくする人、或いは仲間）に類し、現代中国語の「同伴児」（一緒に活動・生活する人、仲間）であるとす。妥当な解であろう。

### 四、朋輩に謀殺された袁術の寵姫馮方の女

『三国志・魏書』卷六「袁術伝」の裴注・『後漢書』列伝卷六十五「袁術伝」の李賢注ともに晋司馬彪撰『九州春秋』中の、袁術の寵姫馮方の女が妬まれて、同輩の女たちに絞殺された話を引く。女たちは絞殺した死体を厠の梁につるして自殺と見せかけた。袁術はまんまとだまされ、女が志のゆえに自ら縊れたと思つてこれを悼んだという。

一九七五年に出土した『雲夢睡虎地秦簡』中の「封診式・経死」には、本物の自縊死体か、自縊と装われた死体かの詳細な検証法が記載されている。袁術ないしその下僚たちは、すでに四百年以上も前に知られていたこの検証法に無知だったのか？あるいは手数を惜しんだか？

## 五、劉表の墓

湖北襄陽によって荊州をおさえていた刺史劉表は、曹操の進攻を受ける直前、建安十三年（二〇八）年に病死した。劉表の墓について、北魏酈道元撰『水経注』卷二十八「沔水中」に「（襄陽）城東門外二百步劉表墓、太康（二八〇～二八九）中為人所発、見表夫妻、其尸儼然、顔色不異、猶如平生、墓中香氣、遠聞三四里中、経月不歇。今墳冢及祠堂猶高顯整頓」とある。樊城をすてて南下、逃走する劉備が「過辞表墓、遂涕泣而去」（『三国志・蜀書』卷二「先主伝」裴注所引魏魚豢撰『典略』）った墓がここだろう。後世の文献では、劉表墓の場所をたがえる記載がある。すなわち、唐歐陽詢等奉勅撰『艺文類聚』卷四十一「礼部下冢墓」所引の南朝宋伍輯之撰『從征記』には「劉表冢在高平郡（今の山東省鄒県西南）、表之子琮擣四方珍香數十斛、著棺中、蘇合消疾之香、莫不畢備、永嘉（三〇七～三二三）中郡人発其墓、表白（貌）如生、香聞数十里」と言う。ちなみに高平郡は、劉表の本貫であるが、南北朝期には北朝の領域に入る。さらに宋樂史等奉勅撰『太平寰宇記』卷三十三「関西道九 原州」の平高県の項にもほぼ同文の『從征記』が引かれている。つまり、劉表墓は永嘉年間、平高県（今の寧夏回族自治区固原県）で発現されたとされる。今の固原の地に漢代の高平県が置かれたが、北朝治下で

平高県と改められた。『太平寰宇記』はこの平高県と漢代山東の高平郡とを混淆した結果、劉表墓を縁もゆかりもない関西の地にかけることになった。著名な人物にまつわる話が拡散し、ついには墓が増殖する等というのは、そう不思議なことではないのかもしれない。

## 六、小結

撰者陳寿の描きだした時代そのもの、陳寿の経歴と叙述の関連、『三国志』と『後漢書』、『三国志』と『三国志演義』、裴松之の注や注所引の諸典籍、裴松之と朝代を同じくした『後漢書』の撰者范曄や『世説新語』の撰者劉義慶等との比較、テキストとしての『三国志』の抄本・版本のこと、校勘・訓詁のこと等々。正史『三国志』をめぐる話題・テーマは尽きない。今回は、興味を覚えていた話柄の断片を、限られた時間の中で披露した。

第五〇六回 五月二〇日(火)

## 三国時代の戦場

東洋文庫研究員  
立正大学教授

窪添慶文

三国期の重要な戦いとして、華北の勝者を決定した官渡の戦い、天下三分の端緒となった赤壁の戦い、劉備が荊州を失い、蜀のみを有することになった樊城の戦い、三分の形勢の確定をもたらした夷陵の戦い、結局三分の形勢を動かすには至らなかったが蜀の北伐をあげることができ、それぞれの戦いがいかなる場で行われたかを以下に扱う。

戦いの場は、都市もしくは城を舞台に戦われるもの、河川を主戦場にするもの、広大な平地を舞台に戦われるもの、河川と様々である。それらの戦場は、必ずしも偶然に戦場となつたというわけのものではなく、戦場となるべく予想される場所でもあった。鄴に本拠を置く袁紹が許に天子を置く曹操を攻める場合、ほぼ南に進み、白馬津もしくは延津で黄河を渡河する可能性が最も高い。故に曹操は戦いの起こる前年から兩津の南方の官渡に壘壁を作り、防御拠点にする作業を行っている。関羽が攻めた樊城は漢水の北岸の軍事

拠点であるが、洛陽もしくは許に長江沿岸にある荊州の要衝江陵から向かう場合の、東西両側に位置する山岳地域を抜けた出口のところに位置する。樊城は関羽としては落とさねばならなかった城であった。夷陵は四川盆地から長江沿いに荊州に下る溪谷部の出口にある。荊州の要衝江陵を押さえ、荊州の水軍を得た曹操が、柴桑を拠点とする孫権の水軍、夏口に位置する劉備軍と対峙する場合、赤壁はその中間点となる。

荊州を失った蜀の戦いは、いつそう地形の制約を受ける。諸葛亮の「隆中对」に示された戦略の一方の要である、荊州から北上して宛・洛陽を攻撃するすべを失い、益州(この場合は漢中盆地)から長安に向かう策のみが残されていたからである。漢中と長安の間には巨大な壁としての秦嶺が存在している。その壁を突破するルートは限られている。(a) 長安の真南に出る子午道、(b) 長安西方に出る褒斜道、(c) 散関を経て現在の宝鶏市に出る陳倉道、これらは険しい溪谷沿いの道で諸処に棧道がある(aとcの間に駱谷道もある)。このほかに(d) 比較的平坦だが大迂回路でもある祁山―天水―関中ルートがある。五度にわたる北伐はこのいずれかを選択せざるを得なかった。第一次は魏延が兵五千でaを用いる長安奇襲を提案したが、諸葛亮は拒否し、bを用いて趙雲に陽動作戦を行わせ、本隊はd

を用い、諸葛亮は祁山に本陣を置き、それに対して魏の三郡が呼応する効果があったが、馬謖が街亭で敗北して撤退に追い込まれた。第二次はcを用いて出陣し、陳倉城を強攻したが抜けず、食糧尽きて撤退。第三次は漢中西方の二郡（武都・陰平）を取る成果を挙げたが、dを部分的に利用している。第四次はdを用いたが、食糧尽きて撤退した。もともとも撤退の際に敵將張郃を討ち取っている。第五次は、bを用いて五丈原に出たが、諸葛亮の病死により蜀軍は撤退した。

魏延の急襲策を採らず、陳倉の包囲も成功しなかったことは、諸葛亮の臨機応変の将才が疑われる因となつてゐる。しかし、第一次北伐は当初は予期した成果を挙げたといえる。その後も諸葛亮はdを用いた作戦を繰り返している。ではdルートはどのような意味を持つていたのであろうか。漢中から祁山までは河川沿いで略陽に出、長江の支流である嘉陵江を廻り、さらに河川に沿つて成県に出、そこから陸路をとつて嘉陵江の支流西漢水を廻り、祁山に出る。祁山からはさらに西漢水を廻り、峠を越えて南溝水の主流に出ると、それをたどつて東部甘肅の要地天水に出る。天水は渭水の主流にあり、さらにその支流に分け入つた地点にあるが、長安のある関中からはほぼ真西にある天水には、渭水を遡つては到達しにくい。天水と宝鶏間は険しい峡谷

で前近代には交通をむしろ疎外する存在だったのである。従つて天水から関中までは、渭水の支流である葫蘆河、ついで清水河を遡つて、隴山に分け入り、峠を越えて千河のつくる峡谷を下つて関中に入るルート、これも渭水の支流である牛頭河を遡つて隴山を越えるルート、がこの時期の主たる交通路であつた。漢中から関中へのこのルートは、全体として険しい峡谷はない。河川沿いにかなり広い面積の盆地が連続して、通行しやすく、盆地と盆地の間の峡谷部分は峠越えを余儀なくされるにしてもさほどの険しさはない。加えて諸葛亮には、祁山―天水ルートを押さえることにより魏の西方を手中にして、補給などの問題への対処を容易にして関中へ、という狙いがあつたと想定できる。実際に隴山より西の天水と南安の二郡が呼応し、隴山以西の魏からの切り離しはいつたん成功した。さらに隴山より東部の安定郡も蜀に呼応している。諸葛亮の狙いはあつたとみるべきで、よつて魏の明帝は自ら長安に赴いた。問題は予測される魏の西征軍への対処であつた。魏の張郃の軍五万は前述の隴山越えルートをとつて西進、蜀の馬謖の軍一万は清水河沿いの、後漢代に略陽県があつた街亭に布陣した。しかし馬謖はおそらくは諸葛亮の意図に違い、防御に便である城を捨てて山に籠もり、敗れたのである。

諸葛亮の最後の北伐の地となつた五丈原は、褒斜道の北

側入口（出口）にできた「原」つまり上部の平らかな広大な台地である。高さがあり、傾斜もきつく、防御に適した台地であつて、しかも防御施設を施したから、攻め落とすのは難しい。よつて司馬懿は挑発されても大規模な攻撃には出ようとしなかつた。諸葛亮も攻勢には出なかつたが、当初は渭水の北側をも占拠する構想があつたのであり、魏の郭淮がそれに備えていたので、実現できなかった。諸葛亮はそれによる魏と西方の切断を狙つていたのである。結局大きな戦いに出ることなく、諸葛亮の死で蜀軍は撤退するが、この戦いを含めて諸葛亮の目は西方確保に向けられていたと考えられる。

戦略及び戦術は地形に制約される。蜀の場合はずっと少ないとはいへ、数万の軍を動かしたのであり、河川沿いに開かれた道をたどる必要があつた。戦場だけでなく、河川をつくつた紡錘状の平地で、しかも他の河川との合流点という甘肃東部の漢代の泉城の配置に通じるところがある。

## 第五〇七回 五月二七日（火）

### 地下史料よりみた『三国志』

中央大学准教授 阿部 幸信

近年の中国の著しい経済発展は、地中に埋もれていた多くの遺物を、続々と白日の下に晒している。こうした「地下」由来の諸史料が、文献史料に基づく伝統的な研究方法に与えた衝撃の大きさには、はかりしれないものがある。しかし、三国時代研究に限つていうならば、従来のものである。重大な修正を迫るに足るだけの遺物はほとんど発見されず、利用できるまとまった文献が事実上『三国志』に限定されることもあつて、詳細な考察が困難である状況はなかなか改善されなかつた。ところが一九九六年、湖南省長沙市の走馬楼で、総数十数万点といわれる大量の孫呉の簡牘（以下「走馬楼呉簡」）が発見されたことにより、新しい方向性がみえはじめている。本講演は、この走馬楼呉簡にスポットをあて、その概要と最新の研究動向を紹介することを目的としたものである。

発掘簡報その他で明らかにされているところによると、

走馬楼具簡の主たる内容は、(1)賦税類大木簡・(2)名籍類竹簡・(3)官府文書(竹簡・木牘)、の三種に分類される。ただし現在のところ、写真版・釈文の公表が完了しているのは(1)のみにとどまり、目下(2)(3)の一部である膨大な小型竹簡の整理が進められている段階で、とくに(3)の木牘については詳しいことがほとんどわかっていない状態である。ゆえに今回は、時間的制約もあることから、(1)を中心的にとりあげることとし、(2)(3)については(1)と関係の深い「調」納入簡に絞って言及した。

賦税類大木簡は、整理小組によって「嘉禾吏民田家莧」と名づけられ、学界では一般にこの呼称が用いられている。「嘉禾」とは孫呉初代皇帝・孫権(大帝)の年号で、賦税類大木簡のすべてに嘉禾四・五(二三五・二三六)年の紀年がみえることから冠せられたものである。長さ五〇センチメートル内外・幅三〜五センチメートル程度の、コウヨウザン材の大ぶりの木簡に、納税者の農地の所在・地段の数量と総面積・作柄(とそれに基づく税率)・課税額・納入日が逐一記されており、孫呉政権の一地方にすぎない長沙においてかくも仔細な徴税システムが機能していたことに、まず驚かされる。ここに含まれる諸情報から、当時の長沙一帯における民戸の居住形態・開発状況・耕作方法などについてさまざまな推定がなされており、うち一部は、

小型竹簡の分析の進展に伴って、さらに検証を加えられつつある。このようにいうとき、小型竹簡のなかでもとりわけ注目されるのが「調」納入簡である。これは民戸から徴発される「調」の賦課額と納入日を記したものであるが、「調」の品目や納入者の身分表記に「吏民田家莧」とは異なった特徴があり、その分析によって、当時の長沙一帯の自然環境や郷里社会の様相、租税徴収のプロセスなどが明らかになってきた。実のところ、租税徴収の実態は三国時代の前後の時代についても具体的には判明しておらず、無論、曹魏や蜀漢の制度も依然明らかではない。そうした中で孫呉の諸制度を相対的にどう捉えるかには議論があるものの、いずれにせよ、これまでまったく不明であった貴重な情報が着実に得られつつあることは特筆に値する。

今後のさらなる整理・公表によって、当時の家族や郷里社会・地方行政のありかたについての解明も進んでいくものと期待される。こうした地道な作業の積み重ねの末に、英雄たちの生きた時代の生々しい姿が描きだされていくだろう。そんな研究の最前線を実感していただけるようにと、他では見ることのできない図像資料なども用意した。文献からみるのとまた一味違った『三國志』の世界」を堪能していただけただけではないか、と思う。